ISSN　0286-5424

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第134号

城陽市下水主遺跡から出土した縄文時代晩期の
木製品類と自然木の樹種について ---------- 能城 修一・村上 由美子・
佐々木 由香・筒井 崇史--- 1
京都府亀岡市佐伯遺跡の発掘調査 ---------- 村田 和弘---11
平成29年度発掘調査略報----------17
７．上野遺跡
８．阿良須遺跡第３次
９．三日市遺跡第14次・車塚遺跡第12次
10. 美濃山遺跡第７次
11. 水主神社東遺跡第９次
12. 芝山遺跡第17次Ⅰ地区
平成30年度発掘調査略報----------27
１．女布遺跡第９次
長岡京跡調査だより・130----------28
センターの動向----------30

2018年11月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 城陽市下水主遺跡から出土した縄文時代晩期の木製品類と自然木の樹種について

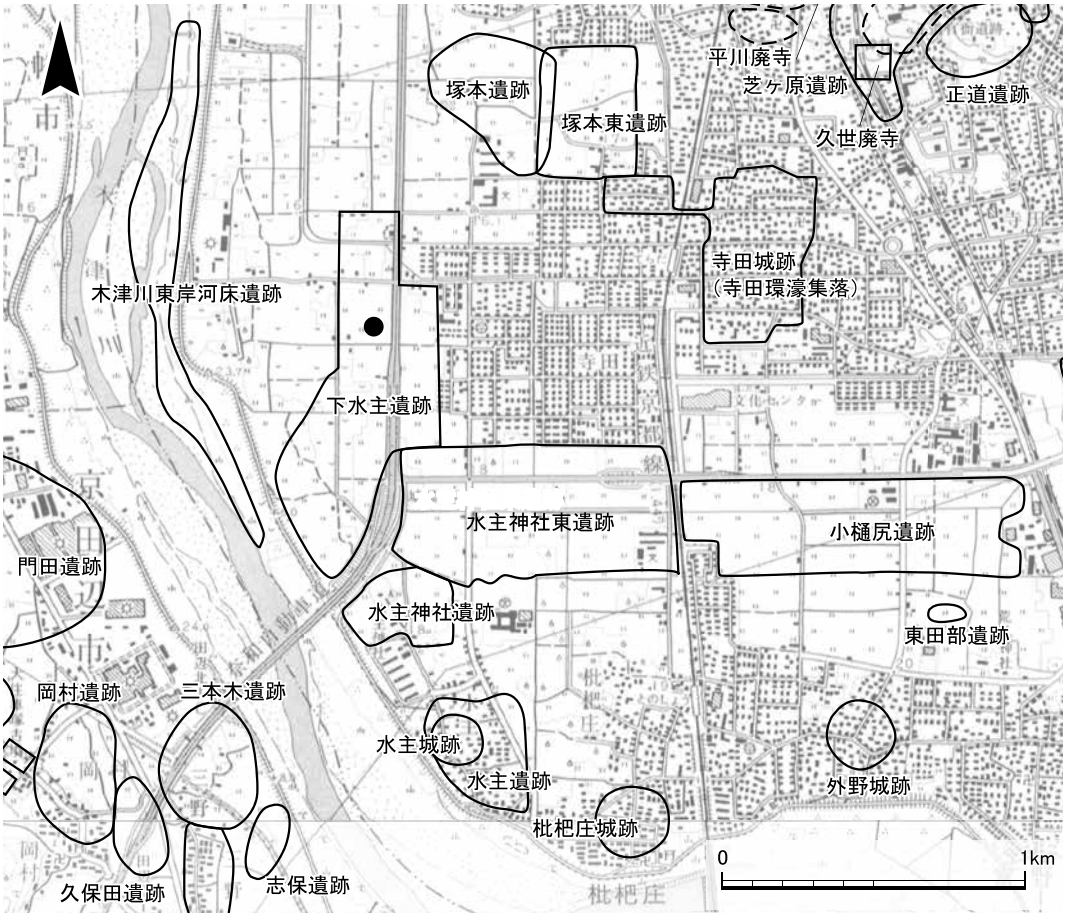
能城 修一・村上 由美子・佐々木 由香・筒井 崇史

## １．はじめに

本稿(注１)は、京都府城陽市に所在する下水主遺跡（第１図）において検出した縄文時代晩期の氾濫流路(注2)から出土した自然木等について分析を加えたものである。対象地の調査は２か年にわたって実施しており、その調査成果についてはすでに報告済みである(注3)。以下では、まず、調査成果の概要について述べた後に、出土木材の分析成果について報告する。

## ２．調査成果

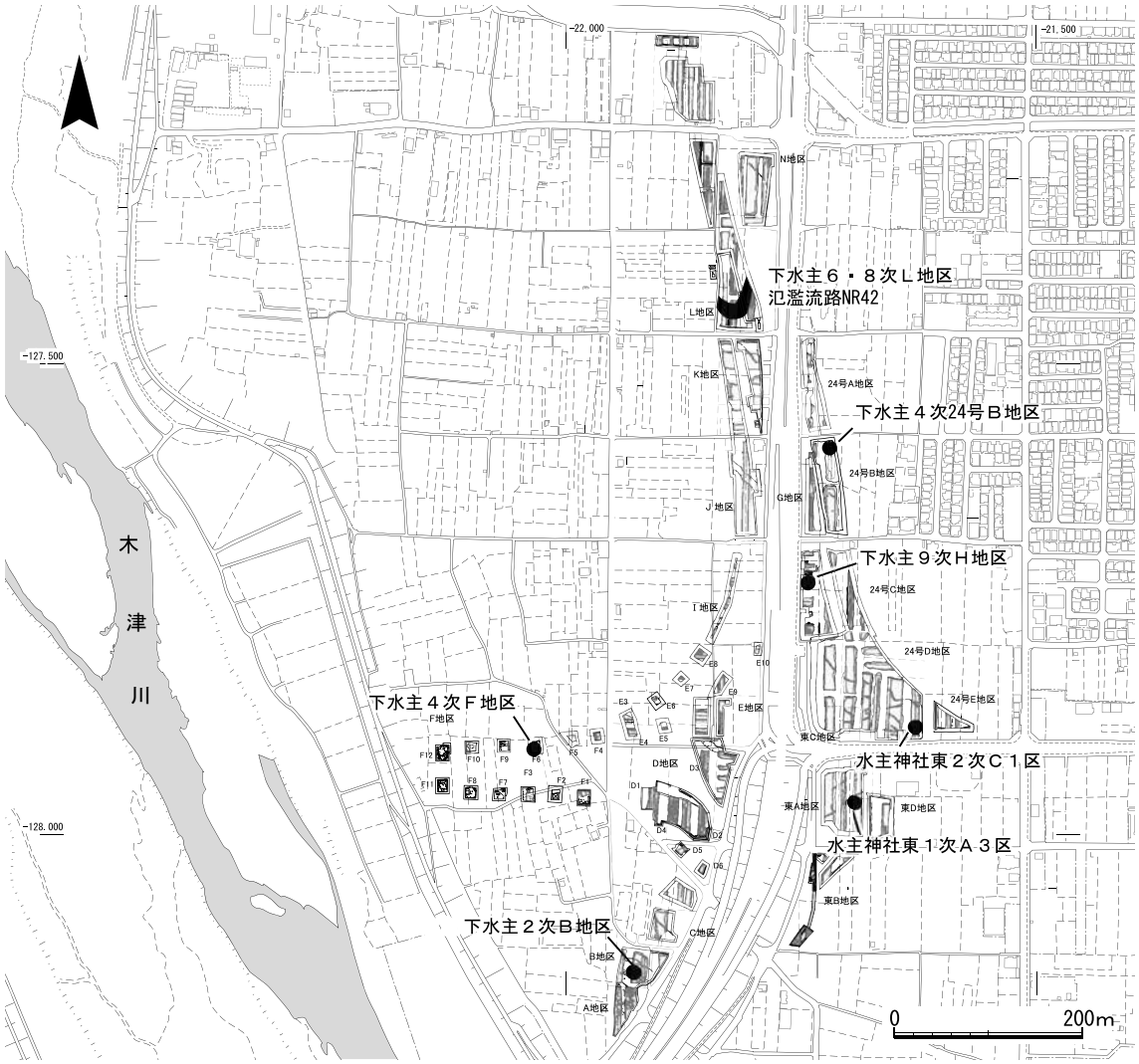
今回報告する氾濫流路については、下水主遺跡第６次調査と同第８次調査で検出したものである（第２図）。両調査とも、新名神高速道路整備事業に伴い、高速道路本線と城陽ＩＣを結ぶアクセス道路を対象に調査を実施したものである。



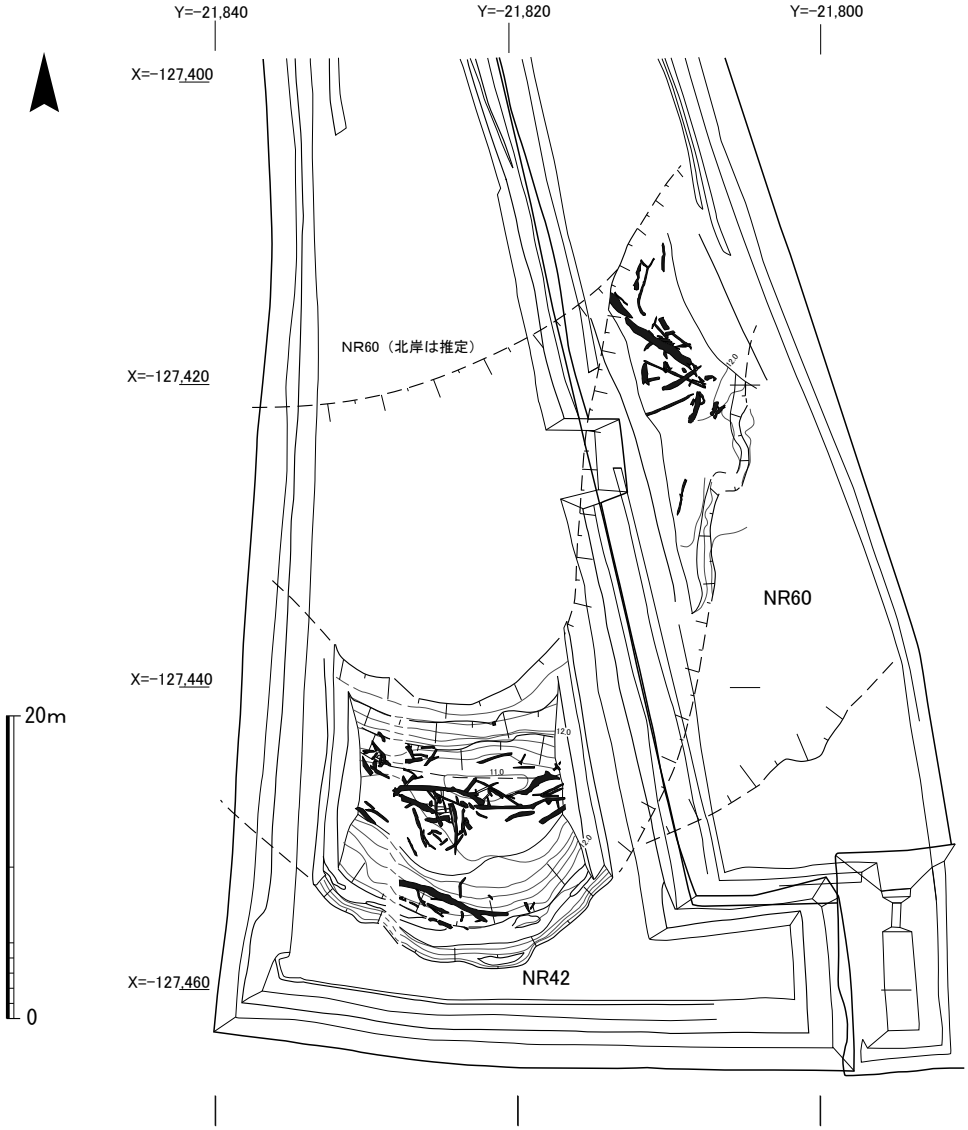

第１図　下水主遺跡調査地位置図（国土地理院１/25,000　宇治・田辺）

第６次調査では、上層遺構として中世の島畑とそれを区画する溝状遺構を検出した。また、中層遺構として弥生時代後期の溝などを検出した。そして､下層遺構として谷状地形や土器溜まり、焼土などを確認した。この谷状地形は木津川の氾濫によって生じた洪水が、当時の地面を抉って形成されたもので、このように形成された流路のことを「氾濫流路」と呼ぶ。第６次調査で確認した氾濫流路ＮＲ 42 は、検出長 16.4 m、幅 17.0 m、深さ 1.7 ～ 2.0 mの規模である。ＮＲ 42 の堆積層からは流木や堅果類などの有機物のほか、縄文時代晩期の土器が多数出土した。また、谷状地形の底では櫂状木製品の未製品なども出土した。

この第６次調査の成果を受けて実施した第８次調査では、上層遺構として島畑とそれを区画する溝状遺構を検出するとともに、下層遺構として氾濫流路ＮＲ 42 の延長部を検出した。また、ＮＲ 42 の下層で、より古い氾濫流路ＮＲ 60 を確認した。どちらの氾濫流路からも多数の流木や堅果類が出土したが、縄文土器はＮＲ 42 でごく少量出土したのみである。ＮＲ 60 は、最大幅が 40 mにも達したが、調査区が狭小であるため流路の底の確認には至らなかった。ＮＲ 60 で出土した植物遺体の放射性炭素年代測定では 2820 ± 30 年 yrBP という年代が得られた。ＮＲ 42 で




第２図　下水主遺跡・水主神社東遺跡縄文遺物出土地点




第３図　流路ＮＲ42実測図

出土した植物遺体の放射性炭素年代測定では 2730 ± 30 年 yrBP という年代が得られた。なお、第６・８次両調査区で検出したＮＲ 42 の規模は、総検出長約 50 m（未調査区を含む）、幅 9.8 ～ 17.1 m 、深さ 1.8 m前後である。

## ３．下水主遺跡出土樹種について

### （１）はじめに

下水主遺跡から出土した縄文時代晩期の木製品類と自然木の樹種を報告する。当遺跡は木津川の自然堤防から後背湿地に位置しており、木製品類は氾濫流路 NR42 から出土した。検討した資料の内訳は、容器１点と、板材１点、加工木１点、自然木 42 点の計 46 点である。

### （２）試料と方法

樹種同定は、木取りを観察した後、木製品類は出土木材から直接、自然木はブロックサンプルか

ら、片刃カミソリをもちいて横断面、接線断面、放射断面の切片を切り取り、それをガムクロラール（抱水クロラール 50g、アラビアゴム粉末 40g、グリセリン 20ml、蒸留水 50ml の混合物）で封入しておこなった。各プレパラートにはSMZ-562 ～ 608 の番号を付して標本番号とした。標本は、森林総合研究所の木材標本庫に保管されている。

（３）同定結果

同定不能のものを除いた試料 45 点中には、針葉樹２分類群と広葉樹 11 分類群の計 13 分類群が認められた（表 1）。以下には、各分類群の解剖学的な記載をおこない、代表的な標本の光学顕微鏡写真を載せて同定の根拠を示す。

１．ヒノキ　Chamaecyparis obtusa（Siebold et Zucc.）Endl.　ヒノキ科　第４図：1a–1c（枝・幹材、SMZ-575）

垂直・水平樹脂道をいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材の量は少ない。早材の後半から晩材に樹脂細胞が散在する。分野壁孔は中型のトウヒ型で１分野に２個。

２．イヌガヤ　Cephalotaxus harringtonia（Knight ex Forbes）K.Koch　イヌガヤ科　第４図：2a–2c（枝・幹材、SMZ-570）

垂直・水平樹脂道をいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材の量は少ない。年輪内に樹脂細胞が散在する。仮道管の内壁にはらせん肥厚がある。分野壁孔は小型のトウヒ型で１分野に２～３個。

３．クスノキ科　Lauraceae　クスノキ科　第４図：３a–3c（枝・幹材、SMZ-599）

小型でやや厚壁の丸い道管が単独あるいは２～３個放射方向に複合してやや疎らに均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で２～３細胞幅。

４．ムクノキ　Aphananthe aspera（Thunb.）Planch.　アサ科　第４図：4a–4c（枝・幹材、SMZ-577）

中型～小型で厚壁の丸い道管が単独あるいは２～３個複合して年輪内で小型化しながら疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材で翼状～連合翼状。放射組織は異性で３～５細胞幅位、直立部にしばしば菱形結晶をもつ。

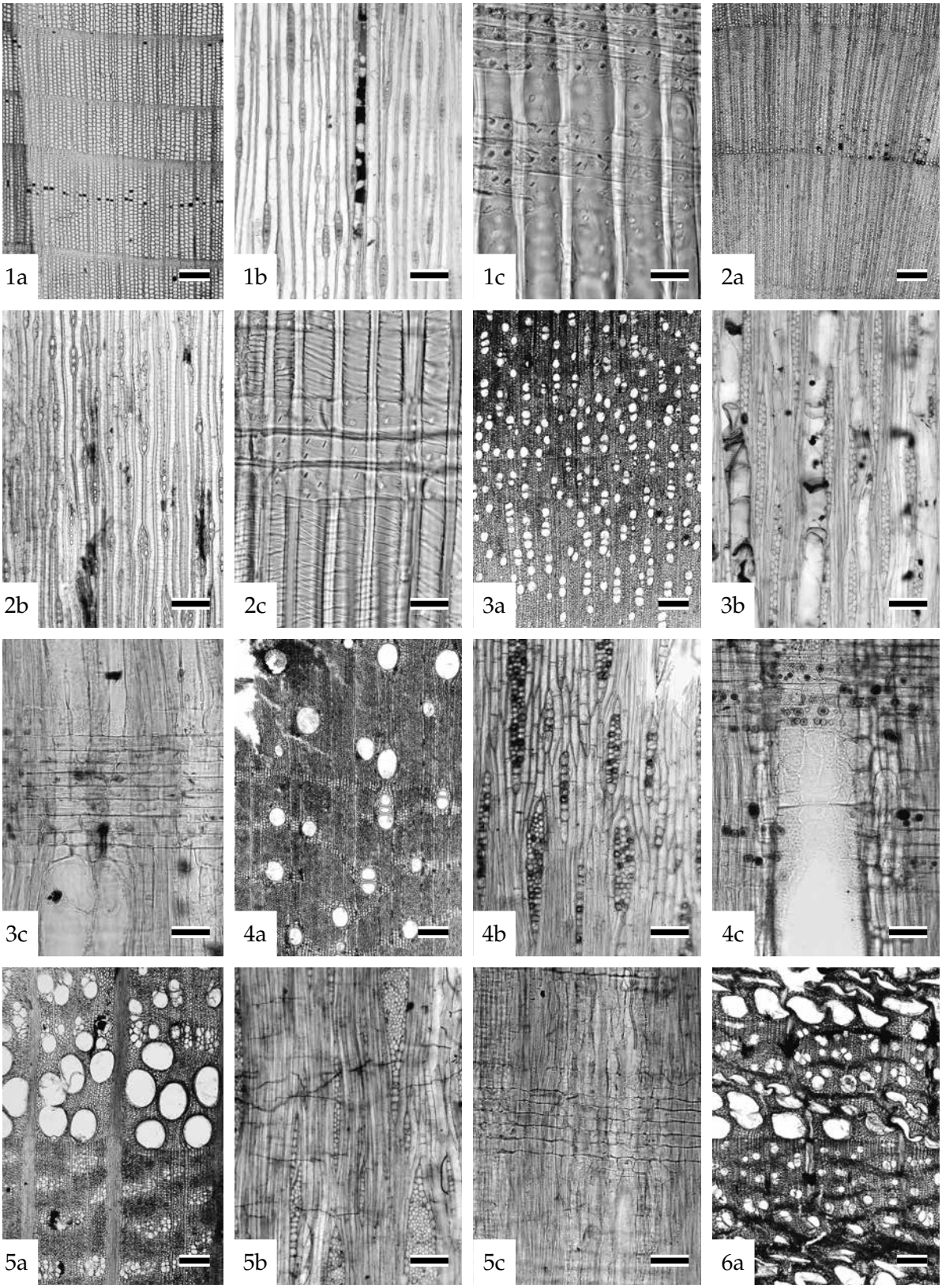
５．エノキ属　Celtis　アサ科　第４図：5a–5c（枝・幹材、SMZ-604）

大型で丸い道管が単独あるいは２～３個複合して年輪の始めに３列ほど配列し、晩材では徐々に小型化した道管が集まって斜め接線方向の帯をなす環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で 10 細胞幅位、鞘細胞をもつ。

６．クワ属　Morus　クワ科　第４・５図：6a–6c（枝・幹材、SMZ-595）、第５図：7a（根株材、SMZ-606）

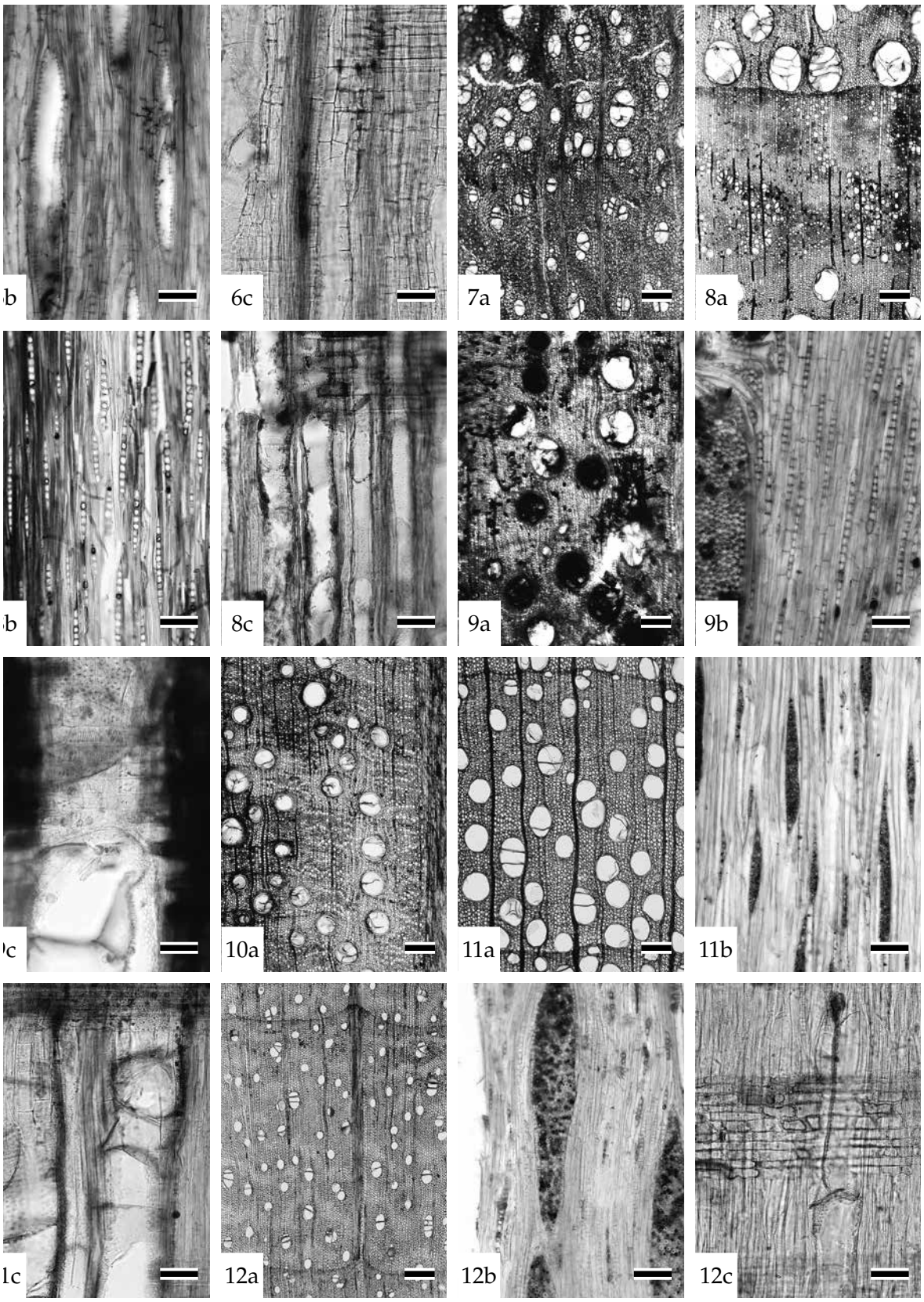
やや大型で丸い道管が単独あるいは２～３個複合して年輪の始めに３列ほど配列し、晩材では徐々に小型化した道管が集まって丸い塊をなして斜めに連なる傾向をみせる環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で５細胞幅位。

根材は中型～小型の道管が徐々に小型化しながらときに数個集まって散在する半環孔材。



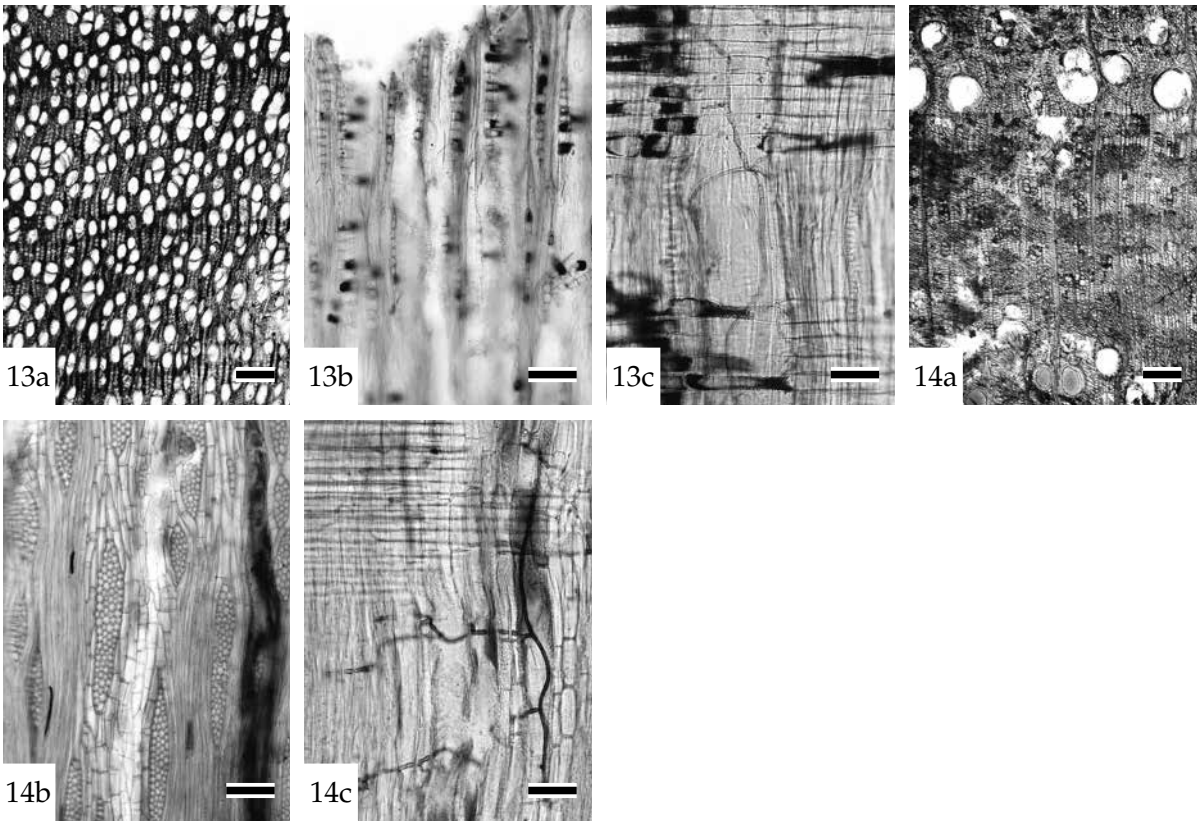

第４図　下水主遺跡出土の縄文時代晩期の木材の顕微鏡写真(1)

1a-1c：ヒノキ(枝・幹材，SMZ-575)，2a-2c：イヌガヤ(枝・幹材，SMZ-570)，3a-3c：クスノキ科(枝・幹材，SMZ-599)，4a-4c：ムクノキ(枝・幹材，SMZ-577)，5a-5c：エノキ属(枝・幹材，SMZ-604)，6a：クワ属(枝・幹材，SMZ-595)，a：横断面(スケール＝200μm)，b：接線断面(スケール＝100μm)，c：放射断面(スケール＝25(1c，2c)，50μm)




第５図　下水主遺跡出土の縄文時代晩期の木材の顕微鏡写真(2)

6b-6c：クワ属(枝・幹材，SMZ-595)，7a：クワ属(根株材，SMZ-606)，8a-8c：クリ(枝・幹材，SMZ-590)，9a-9c：イチイガシ(枝・幹材，SMZ-585)，10a：コナラ属アカガシ亜属(枝・幹材，SMZ-600)，11a-11c：オニグルミ(枝・幹材，SMZ-591)，12a-12c：カエデ属(枝・幹材，SMZ-596)，ａ：横断面(スケール＝200μm)，ｂ：接線断面(スケール＝100μm)，ｃ：放射断面(スケール＝50μm)




第６図　下水主遺跡出土の縄文時代晩期の木材の顕微鏡写真(3)
13a-13c：トチノキ(枝・幹材，SMZ-581)，14a-14c：ムクロジ(枝・幹材，SMZ-598)， a ：横断面(スケール＝200μm)， b ：接線断面(スケール＝100μm)， c ：放射断面(スケール＝50μm)

**７．クリ**　Castanea crenata Siebold et Zucc.　ブナ科　第５図：8a–8c (枝・幹材、SMZ-590)

ごく大型で丸い孤立道管が年輪の始めに３列ほど配列し、晩材では徐々に小型化した孤立道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。放射組織は単列同性。

**８．イチイガシ**　Quercus gilva Blume　ブナ科　第５図：9a–9c (枝・幹材、SMZ-585)

直径が 220μm をこえる大型で丸い孤立道管が放射方向に配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織はいびつな接線状。放射組織は同性で、単列の小型のものと複合状の大型のものとからなる。

**９．コナラ属アカガシ亜属**　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　第５図：10a (枝・幹材、SMZ-600)

イチイガシに似る放射孔材で、道管径は 200μm 以下。

**10．オニグルミ**　Juglans mandshurica Maxim. var. sachalinensis (Komatsu.) Kitam.　クルミ科　第５図：11a–11c (枝・幹材、SMZ-591)

やや大型～小型で丸い道管が単独あるいは２～３個複合して年輪内で徐々に小型化しながらやや疎らに散在する半環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は接線状。放射組織は同性で４細胞幅位。

表１　下水主遺跡から出土した縄文時代晩期の自然木の樹種

| 樹種名 | SR | 容器 | 板材 | 加工木 | 自然木 |
|---|---|---|---|---|---|
| ヒノキ | S | | 1 | | 1 |
| イヌガヤ | S | | | 1 | 1 |
| クスノキ科 | S | | | | 2 |
| ムクノキ | S | | | | 5 |
| エノキ属 | S | | | | 2 |
| クワ属 | S | | | | 1 |
| | SR | | | | 1 |
| クリ | S | | | | 14 |
| イチイガシ | S | | | | 1 |
| コナラ属アカガシ亜属 | S | | | | 5 |
| オニグルミ | S | | | | 1 |
| カエデ属 | S | | | | 2 |
| トチノキ | S | 1 | | | 3 |
| | 樹皮 | | 1 | | 1 |
| ムクロジ | S | | | | 1 |
| 広葉樹 | 樹皮 | | | | 1 |
| 総計 | | 1 | 2 | 1 | 42 |

Ｓ：枝・幹材、　ＳＲ：根株材

**11. カエデ属**　Acer　ムクロジ科　第５図：12a–12c（枝・幹材、SMZ-596）

小型で丸い道管が単独あるいは２～３個複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。木繊維は雲紋状を呈する。放射組織は同性で 10 数細胞幅となる。

**12. トチノキ**　Aesculus turbinata Blume　ムクロジ科　第６図：13a–13c（枝・幹材、SMZ-581）

小型で丸い道管が単独あるいは２～３個複合してやや密にやや夫均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性で層階状に配列する。

樹皮では単列で背の低い放射組織が層階状に配列する。

**13. ムクロジ**　Sapindus mukorossi Gaertn.　ムクロジ科　第６図：14a–14c（枝・幹材、SMZ-598）

やや大型で丸い道管が単独あるいは２個複合して年輪の始めに３列ほど配列し、晩材ではやや急に小型化した道管が集まって放射方向にのびる塊をなして散在する環孔材。道管の穿孔は単一で内壁にはらせん肥厚がある。木部柔組織は晩材で翼状～連合翼状。放射組織は同性で５細胞幅位。

**（４）考察**

下水主遺跡の氾濫流路ＮＲ 42 からは縄文時代晩期のトチノキの容器と、ヒノキとトチノキ樹皮の板材、イヌガヤの加工木が出土した（表 1）。これまで近畿地方では縄文時代の木製品類の出土は少なく、板や棒を中心として 87 点が報告されているが（伊東・山田 2012）、容器の報告は今回が初めてである。トチノキは全国的にみて縄文時代でもっとも容器として選択されている素材であり、同様の素材選択が近畿地方でも行われていたことを示している。

自然木ではクリが全体の３分の１を占めており、ムクノキとコナラ属アカガシ亜属、トチノキ

がそれに続く（表1）。コナラ属アカガシ亜属と針葉樹を除くと落葉広葉樹が占めていて、落葉樹の多い森林中に常緑樹が混生するような森林が周辺に成立していたと考えられる。近畿地方では花粉分析により、約7300年前の鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の降灰前後に落葉広葉樹が優占する森林からアカガシ亜属が優占する照葉樹林に置き換わったことが示されている（高原1998；北川ほか2009）。兵庫県神戸市の垂水日向遺跡においては縄文時代中～後期の埋没林が見いだされ、多様な針葉樹や広葉樹をまじえた照葉樹林が大阪湾北岸に成立しており、イチイガシが主要な構成要素の一つであったことが明らかになっている（能城ほか2014）。垂水日向遺跡と比べると当遺跡では照葉樹林の要素が少なく、クリが多いことが特徴である。クリは落葉広葉樹林が卓越する東日本でも森林中で優占することはなく、縄文時代におけるクリ林の存在は、東日本では集落の存続および人間による森林資源管理と密接に結びついていることが明らかとなっている（吉川ほか2006、能城・佐々木2014）。西日本でも現在はクリが優占する森林は知られていないが、奈良県橿原市の観音寺本馬遺跡で縄文時代晩期の集落の近傍にクリ林の存在が確認されている（高橋ほか2012）。こうした状況から、当遺跡におけるクリ材の多産は当遺跡周辺における縄文人によるクリ林の管理を示している可能性が高い。

また当遺跡でイチイガシが1点だけ認められたことも当時の植生を考える上で重要である。イチイガシは、九州では縄文時代早期以降、貯蔵穴から果実が多数出土して盛んに利用されていたことが分かっている（小畑2011）。瀬戸内海以西では、基本的に中期以降しかイチイガシの果実は出土せず、垂水日向遺跡の埋没林が示しているように、イチイガシはその頃になって照葉樹林の1要素として分布を東方に拡大していったと考えられる（能城ほか2014）。また滋賀県大津市の粟津湖底遺跡では、縄文時代中期の層準からイチイガシの果実が報告されており（伊藤・南木1992）、縄文時代中期には近畿地方の内陸部にもイチイガシの分布が広がっていたことが分かっている。当遺跡での木材の出土は、弥生時代以降に盛んに木材が利用されるイチイガシが縄文時代晩期に木津川の下流部という近畿地方中央部にふつうに生育していたことを示している。

（のしろ・しゅういち＝明治大学黒耀石研究センター）
（むらかみ・ゆみこ　＝京都大学総合博物館）
（ささき・ゆか　　＝明治大学黒耀石研究センター）
（つつい・たかふみ　＝当調査研究センター）

注1　本稿は、1・2を筒井が、3を能城・村上・佐々木がそれぞれ執筆した。

注2　「氾濫流路」については当調査研究センター増田富士雄理事（京都大学名誉教授）よりご教示いただいた。

注3　①石井清司ほか「一般国道24号城陽ＩＣ関連寺田地区改良事業関係遺跡平成26・27年度発掘調査報告」（『京都府遺跡調査報告集』第170冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2017

②筒井崇史ほか「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成 26・27 年度発掘調査報告」（『京都府遺跡調査報告集』第 174 冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2018

【引用文献】

伊藤由美子・南木睦彦 1992.「粟津湖底遺跡第 3 貝塚Ⅱトレンチ貝層及び貝層下植物遺存体層の大型植物化石」『南湖粟津航路（2）浚渫工事に伴う発掘調査概要報告書―粟津湖底遺跡』 75 ～ 84 頁　滋賀県教育委員会

伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学：出土木製品用材データベース』449 pp.　海青社

北川　陽・吉川周作・高原　光 2009「夢州沖コアの花粉分析に基づく大阪湾集水域における完新世の植生変遷」『第四紀研究』48　351 ～ 363 頁

能城修一・佐々木由香 2014「遺跡出土植物遺体からみた縄文時代の森林資源利用」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 187 集　15 ～ 48 頁

能城修一・南木睦彦・鈴木三男・千種　浩・丸山　潔 2014『大阪湾北岸の縄文時代早期および中～晩期の森林植生とイチイガシの出現時期」『植生史研究』22　57 ～ 67 頁

小畑弘己 2011『東北アジア古民族植物学と縄文農耕』309 pp.　同成社

高原　光 1998「近畿地方の植生史」『図説日本列島植生史』（安田喜憲・三好教夫編）114 ～ 137 頁　朝倉書店

高橋　敦・田中義文・辻本裕也・辻　康男・松元美由紀・田中義文・馬場健司 2012「観音寺本馬遺跡の自然科学分析」『観音寺本馬遺跡』118 ～ 168 頁　橿原市教育委員会

吉川昌伸・鈴木　茂・辻　誠一郎・後藤香奈子・村田泰輔 2006「三内丸山遺跡の植生史と人の活動」『植生史研究』特別第 2 号　49 ～ 82 頁

# 京都府亀岡市佐伯遺跡の発掘調査

村田 和弘

## １．はじめに

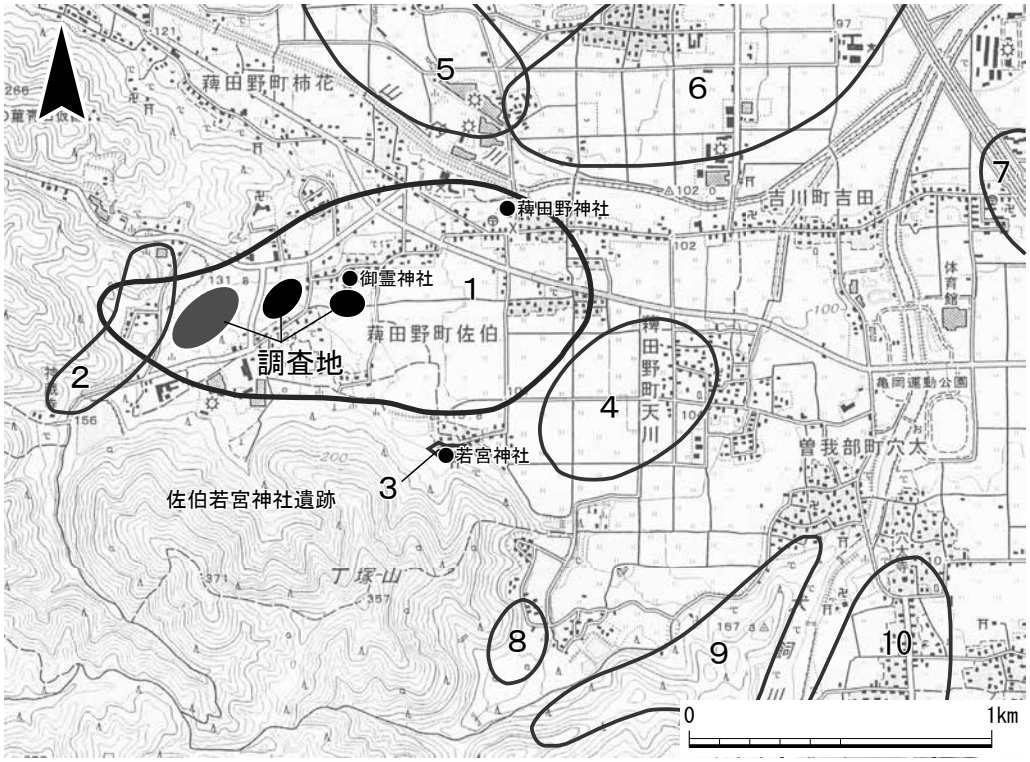
佐伯遺跡は、京都府亀岡市稗田野町佐伯に所在する縄文時代から中世にかけての集落遺跡である(第１図)。

今回の佐伯遺跡の発掘調査は、国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」の実施に伴い、京都府教育委員会と亀岡市教育委員会の試掘調査結果を踏まえ、当調査研究センターが平成27年度から継続して実施した(第２図)。現地調査期間は平成29年５月９日から平成30年２月19日まで実施し、調査面積は7,342㎡である。

## 2. 調査概要

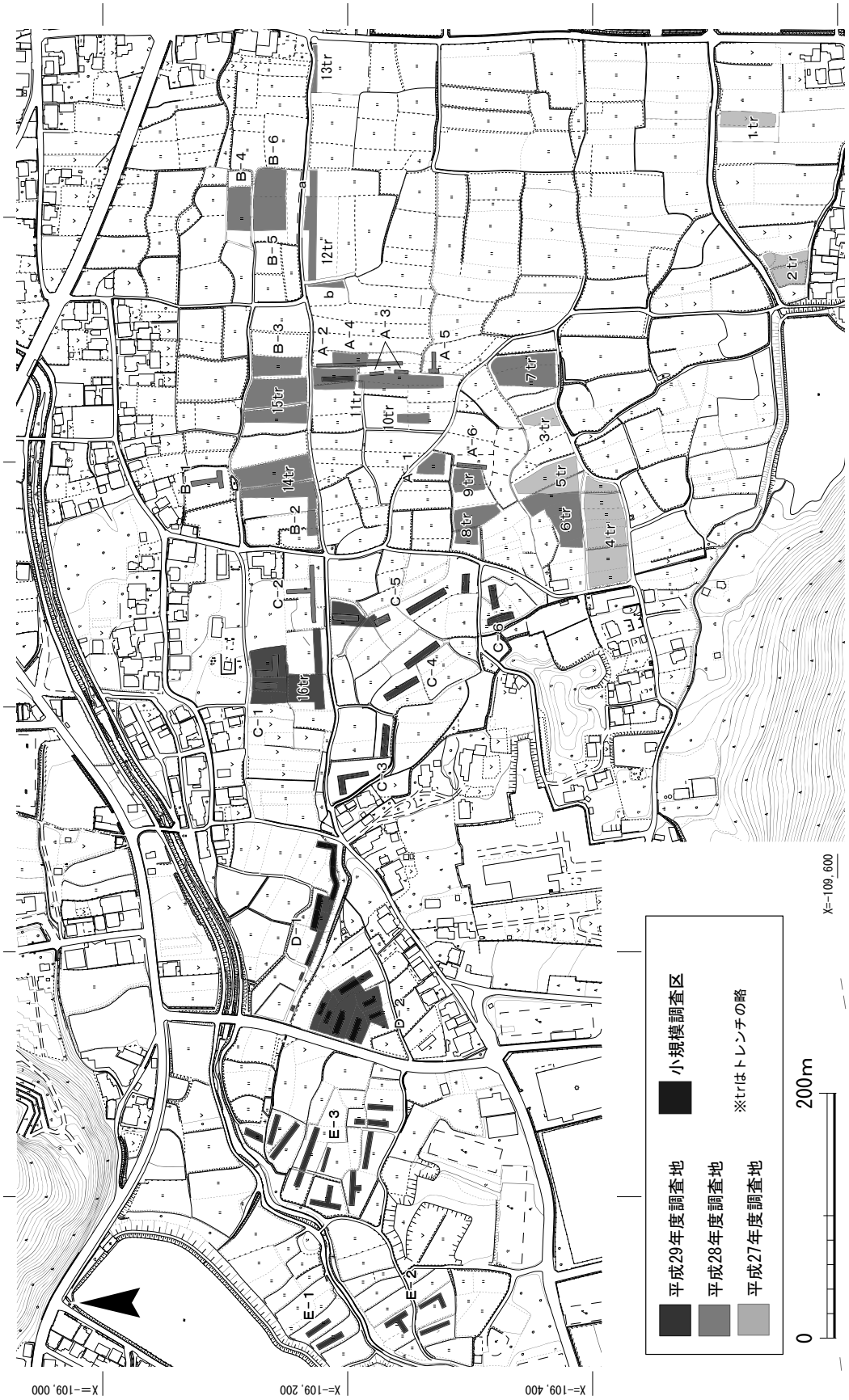
調査地区は遺跡の北西部に当たる工事区である。調査は面的調査となる本調査区と遺跡内の遺跡・遺構の広がりを確認する小規模調査区に分けて実施した。

今回の調査で検出した主な遺構や出土遺物について報告する。

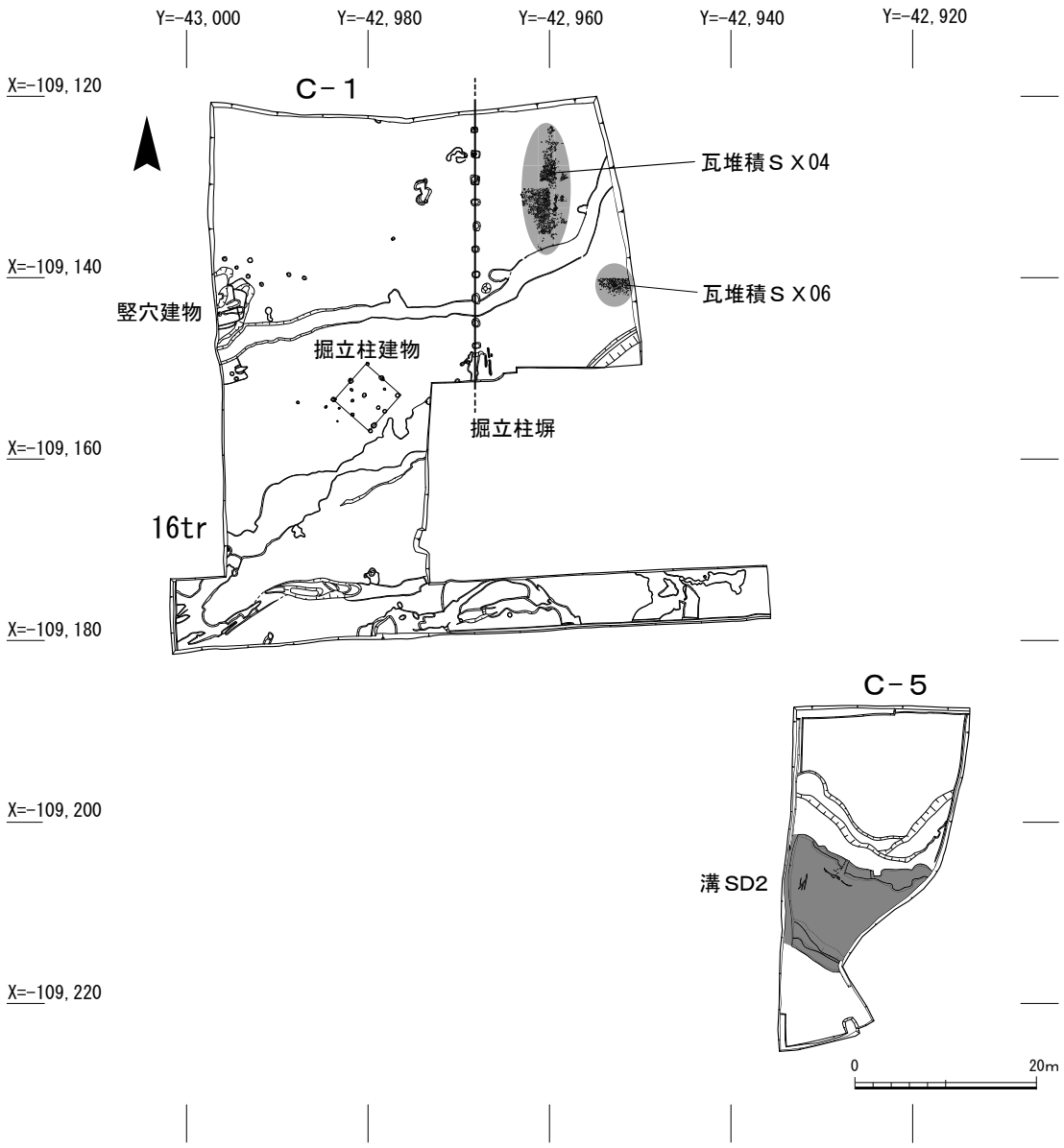



１．佐伯遺跡　２．佐伯古墳群　３．佐伯若宮神社館跡　４．天川遺跡　５．鹿谷遺跡
６．太田遺跡　７．穴川遺跡　８．口山古墳群　９．穴太古墳群　10．穴太遺跡

第１図　調査地と周辺遺跡分布図(国土地理院１/25,000　亀岡)




第２図　佐伯遺跡調査地配置図（１/5,000）




第３図　Ｃ地区遺構平面図

**Ｃ－１トレンチ・16トレンチ**　Ｃ－１トレンチは、昨年度の小規模調査で柱穴を検出し、瓦が出土したことから本調査区となった。16トレンチは、隣接していることからつなげて調査した（第３図）。Ｃ－１トレンチでは、瓦堆積ＳＸ01・04・06で奈良時代から平安時代に属すると考えられる軒丸瓦や軒平瓦などの屋根瓦に使用した瓦類が多量に出土した。出土状況から瓦葺きの建物が倒壊した状態ではなく、投棄されて堆積したものと考えられる。また、中央部で瓦堆積より約0.2mの下層面から、隅丸方形を呈する柱穴を2.5～2.8mの間隔で10基検出した。柱穴は南北方向に並び、一辺が0.7～１m、深さは0.6～0.8mを測り、トレンチ内で検出した総延長は約24mである。この柱穴列の東西には建物を構成する柱穴が展開しないことから、南北方向の掘立柱塀と考えられる。西側では、１辺が約４m前後の方形を呈する古墳時代後期（６世紀末～７世紀初め）と考えられる竪穴建物（ＳＨ07・70・84・85）４棟を検出した。

第４図　掘立柱塀ＳＡ１検出状況(南から)

第５図　瓦溜まりＳＸ04検出状況(西から)

特筆すべき遺物として、表土掘削時に出土した瓦塔がある。瓦塔は木造の塔を模した小型の土製品であり、屋根部の破片が１点出土した。木造の塔の代用、もしくは瓦塔そのものが仏教信仰の対象として使用されたと考えられるものである。

**Ｃ－５トレンチ**　昨年度の小規模調査の結果を受け、本調査区となった。最大幅約８ｍ、深さ約0.4ｍを測る溝ＳＤ２の埋土から、須恵器杯や蓋などの平安時代前期から中期（９～10世紀）にかけての土器が出土した。そのなかには墨で「福」や「田屋」などと書かれた土器あり、「□益□」と３文字書かれた木簡や皿や下駄・櫛などの木製品など多量に出土している。

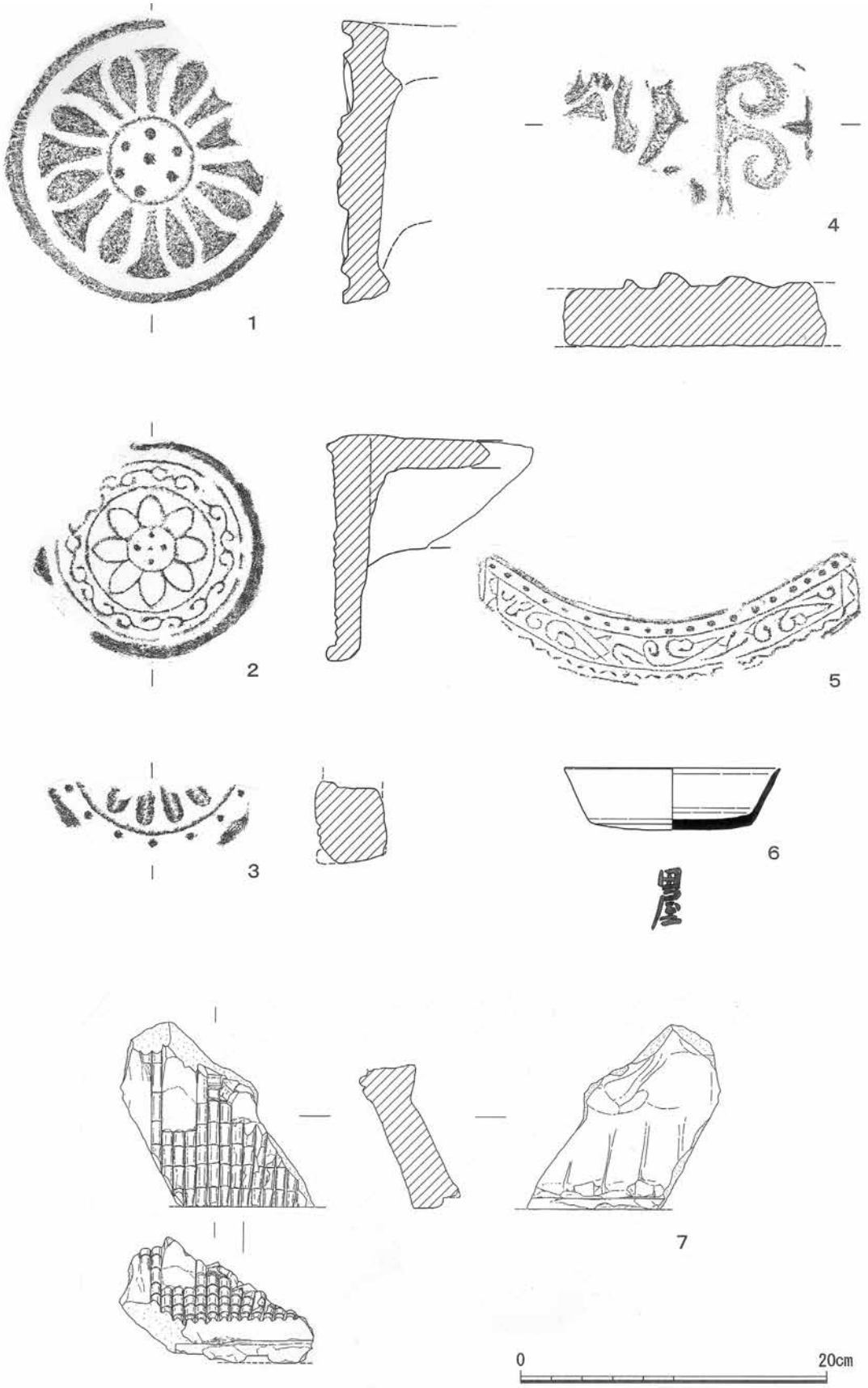
**Ｄ－１トレンチ**　小規模調査区の東側３地区について拡張して本調査区となった。幅約1.8m、深さ約0.4ｍを測る東西方向の溝ＳＤ03からは、奈良時代の須恵器や奈良時代と思われる鬼瓦片１点などが出土した。

**Ｄ－２トレンチ**　小規模調査の結果、遺構が確認したため拡張し調査した。トレンチ西側で最大幅約３ｍ、深さ約0.3ｍの南北方向の溝ＳＤ01を検出した。また、南東側では掘立柱建物の一部を検出した。

## ３．まとめ

今回の調査で検出した遺構は、これまでの調査と同様に後世の土地利用等によって削平を受けており、残存状態はよくないが、掘立柱塀や掘立柱建物、溝、竪穴建物などの遺構を検出した。また、遺物についても、多量の瓦類や土器、木製品などが出土した(第６図)。

Ｃ－１トレンチで出土した多量の瓦類のうち、軒丸瓦には文様が３種類あり、瓦当の文様から最も古いとみられる単弁の軒丸瓦(第６図１)を奈良時代初め頃と想定した。この軒丸瓦が寺院創




第６図　出土遺物実測図

第７図　瓦塔屋根部分

建時または瓦葺建物の建てられた時期に用いられていた可能性がある。次に、文様の凹凸が簡略された軒丸瓦（第６図２）が最も多く出土した。この軒丸瓦は綾部市の綾中廃寺で出土した軒丸瓦と同笵であることがわかった。さらに、１種類しか出土していない軒平瓦（第６図５）についても綾中廃寺で出土した軒平瓦と同笵であることがわかった。この軒丸瓦の時期については、Ｃ－５トレンチの平安時代前期から中期の遺物が出土した溝ＳＤ02でも同文の軒丸瓦が出土していることから、平安時代前期から中期までのものと想定される。寺院の改修などに使用されたと考えられる。これらの軒丸瓦や軒平瓦は、綾中廃寺出土の瓦と同笵関係にあることから、瓦製作における工人の移動など、綾中廃寺を建てた集団との強い結びつきがあったと考えられる。もう１種類の軒丸瓦（第６図３）については、小片で１点のみの出土であるため、時期や類例についても不明である。さらに、西側に約200m離れたＤ－１トレンチの溝ＳＤ03から鬼瓦片が出土しており、寺院に関連する建物の配置などの検討が必要である（第６図４）。瓦堆積から多量の瓦類が出土したことから、付近に瓦葺建物が存在したことが考えられる。

また、瓦出土面より約0.2m下層で検出した南北方向の掘立柱塀は、一辺が約0.7～１ｍを測る方形掘方の柱穴を持ち、南北方向約25mを確認できた。この掘立柱塀は何らかの施設を区画するために設置されたものと考えられる。

今回の調査では具体的な建物や寺院名を記す土器などは確認できなかったが、奈良時代の寺院などで用いられる多量の瓦類、仏教信仰の対象とされる瓦塔などが出土していることから寺院であったことが想定できる。佐伯遺跡内にも寺院の存在が想定される成果が得られ、丹波地域における仏教の広がりを考えるうえで重要な手がかりになると思われる。

（むらた・かずひろ＝当調査研究センター調査課第１係主査）

## 平成 29 年度発掘調査略報

# 7. 上野（うえの）遺跡

**所 在 地**　京丹後市丹後町上野地内

**調査期間**　平成29年８月21日～平29年12月４日

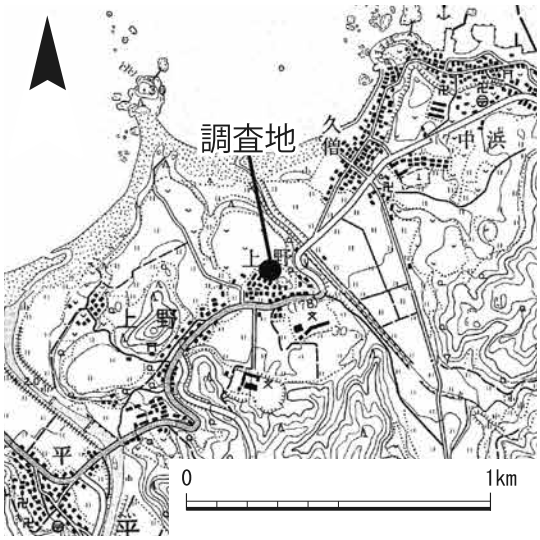
**調査面積**　1,700㎡

**はじめに**　上野遺跡は日本海に面する海岸段丘上に位置し、近隣の小学校建設時に縄文時代から平安時代にかけての遺物が出土している。今回の発掘調査は、浜丹後線(上野平バイパス)民安関連道路新設改良工事に先立ち、京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施した。

**調査概要**　調査対象地に６か所のトレンチを設定し、調査を実施した。調査対象地の東半にあたる第１～４トレンチでは柱穴・土坑を検出したが、これらの柱穴列から、掘立柱建物の復元を試みたが、上屋構造を想定できる組み合わせは見出せなかった。

西半の第５～６トレンチは、東半のトレンチに比べて遺構・遺物の分布は希薄で、耕作土直下にいわゆる地山層が確認できた。任意に設定したトレンチのうち、第１・２トレンチに遺構が集中することから、拡張区１として面的な調査を実施し、第３・４トレンチも東半に遺構が分布する傾向があることから、一部を拡張して調査を実施した。

**拡張区１**（第１～２トレンチ）　拡張区１では、古墳時代の土師器甕や脚台が出土した土坑（ＳＫ１・２)、縄文時代～古墳時代にかけての遺物や焼けた骨を伴うことから、竪穴建物に伴う炉跡と考えられる焼土坑(ＳＸ３・４)を検出した。




調査地位置図
（国土地理院　1/25,000　丹後平・丹後中浜）

**第３・４トレンチ**　第３・４トレンチでは、拡張区１に比べて遺物・遺構の分布がやや薄い。しかし、遺物・遺構が多く分布する拡張区１に隣接することから、東側に向かってトレンチを拡張し、調査を実施した。本トレンチからは拡張区１とは異なり、明確な時期比定が可能な遺物・遺構は確認できなかった。

**まとめ**　今回の発掘調査で得られた成果は、小学校建設時に出土したとされる資料とおおむね矛盾のない内容であった。遺物の多くは、縄文時代～近現代にかけての陶磁器・土器・石製品で、ほとんどの遺構の内外でこれらが混在する様相での出土であった。よって、今回の調査

で確認したほとんどの遺構の明確な帰属時期は判断し得ない状況であった。しかし、一部の遺構については年代決定に資する遺物が比較的良好な状態で出土した。これらの遺構の掘り込みはいずれも浅く、同一遺構面上で近現代の陶磁器がみられることから、本遺跡が立地する段丘面が近代～現代にかけて大きく削平されたと判断できる。遺構の分布が東半に濃く、西半に薄いことからも現地表面に比べて西側が高く東が低い地形であったことが想定できる。また、遺物の分布も遺構の分布と同じ様相を示している。現在の集落は、海陸風に直接さらされる西側ではなく段丘の東半に営まれている。遺跡の中心も現在の集落と同じく東側に位置すると考えられ、本地域における通時的な土地利用のあり方を考える好材料を得ることができた 。　　（面 将道）

写真１　調査地遠景（北東から）

写真２　拡張区１全景（西から）

# 8. 阿良須（あらす）遺跡第３次

**所 在 地**　福知山市大江町北有路ほか

**調査期間**　平成29年８月22日～平成29年12月25日

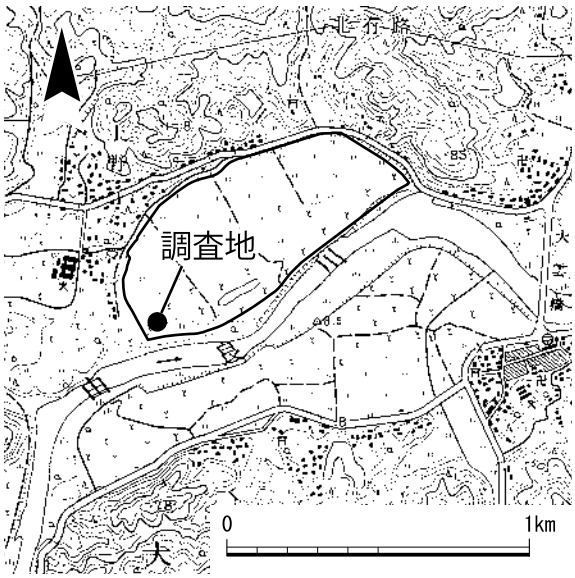
**調査面積**　1,100㎡

**はじめに**　阿良須遺跡は、若狭湾に注ぐ由良川下流域左岸の自然堤防上に立地する。当遺跡は、古墳時代の遺物散布地として知られているほか、条里制地割遺構の残存が指摘されている。

今年度は、当該遺跡地内に由良川緊急治水対策事業が計画されたため、平成27年度の小規模調査で遺構・遺物を確認した調査対象地の南西において、面的な調査（第３次調査）を実施した。

**調査の概要**　調査前の地表面の高さは、標高8.5～9.3mである。現代の盛土を除けば、基本的な土層はシルトの混じる砂層が複数層堆積した状況である。

第１遺構面は、中世遺物包含層の下面（標高6.3～7.0m）にあたる。調査地東側で由良川の洪水に伴う砂利層（最大1.2mの厚さ）の上面を検出した。この面からは、２か所の自然地形と考えられる落ち込みに少量の土器が流れ込む状況が見られたが、その他は顕著な遺構を確認することはできなかった。第２遺構面は、古墳時代中期から飛鳥もしくは奈良時代前半の遺物を含む包含層の下面（標高約4.2～6.5m）である。調査地中央部北西端の標高が最も高く、この部分より南や西へ緩やかに傾斜して下がる地形が確認できた。調査地南西部の半分程度は、上層からの砂層で削平されていた。なお、平成27年度の小規模調査で検出されていた土坑の周辺を拡張したところ、自然地形の落ち込みである可能性が高いことが判明した。第３遺構面の北半部は、上層からの砂層によって大きく削平されており、最北部に至っては、標高4.3mまで掘り下げたが、第３遺構面に到達することはできなかった。南半部は、一部で第３遺構面（標高4.2～5.6m）が確認できた。遺物は、弥生時代後期の弥生土器や、古墳時代前期の土師器が少量出土した。




調査地位置図
（国土地理院　1/25,000　河守）

**まとめ**　今回の調査では、第２遺構面の高まり部分を中心に、古墳時代中期から飛鳥時代の土器が良好な状態で出土した。出土状況などから、由良川の氾濫によって流れ着いた可能性が高いと考えられる。また、土器表面の摩耗がほとんど認められないことから、調査地の近くに集落が存在する可能性が高い。

（藤田 智子）

# 9. 三日市遺跡第14次・車塚遺跡第12次

**所 在 地**　亀岡市馬路町上三日市

**調査期間**　平成29年12月５日～平成30年１月24日

**調査面積**　300㎡

**はじめに**　三日市遺跡・車塚遺跡は、亀岡盆地北東部に位置する遺跡である。周辺には、丹波最大の後期前方後円墳である千歳車塚古墳（全長82m）や、丹波国府跡推定地や丹波国分寺跡など亀岡盆地の主要遺跡が近在する。調査地は、平安時代の瓦窯と推定される遺構が発見された三日市遺跡の北部域と、縄文土器が出土した車塚遺跡の南部域が重複する地点に立地する。

**調査の概要**　発掘調査は、計画路線の西端の地点を対象とし、平成27年度調査区の西側隣接地で実施した。２か所の調査区（１区・２区）を東西に設定し、調査面積は計300㎡を測る。

**１区**は、調査対象地の東に設定した調査区である。奈良～平安時代の建物跡や柱列、柱穴のほか、中世と推定される溝や落ち込み等を検出した。主要遺構としては、東部で掘立柱建物跡ＳＢ101を検出した。柱穴は、方形掘形をなし、２間×１間以上の規模をなす。柱間約2.1mを測り、正方位の主軸をもつ。また、この建物跡の西側で、南北方向の柱列ＳＡ102を検出し、周囲で奈良～平安時代の柱穴群を確認した。中世遺構として、調査区北東で平行する２条の溝ＳＤ110・ＳＤ111を検出した。幅約0.3mを測り、約２mの距離を保ち、南北方向に掘削されている。

**２区**は、１区と里道を挟み、西側に設定した調査区である。瓦を多量に出土した土坑や、時期不明の柱穴・落ち込み等を検出した。２区西側では、砂礫層の拡がりを確認し、奈良～平安時代と推定される須恵器や瓦が出土した。また、断ち割り調査では、少量の縄文土器や、弥生土器、石器等が出土したが、遺構は検出されなかった。主要遺構として、東部で楕円形状をなす土坑ＳＫ201を検出し、長辺1.3m、短辺0.8m以上の規模をもち、土坑内から縄目叩きをもつ平瓦が出土している。

調査地位置図
（国土地理院　1/25,000　亀岡）

**まとめ**　今回の調査では、２か所の調査区から、掘立柱建物群や土坑を中心とする遺構を検出した。１区の建物遺構や２区土坑から出土した遺物は、丹波国分寺の瓦を焼成したとされる三日市遺跡瓦窯から出土した遺物とおおよそ同時期のものであり、調査地周辺に奈良～平安時代の遺構が拡がることが判明した。

（高野 陽子）

# 10.美濃山（みのやま）遺跡第７次

所 在 地　八幡市美濃山出島

調査期間　平成29年４月18日～平成30年３月２日

調査面積　8,000㎡

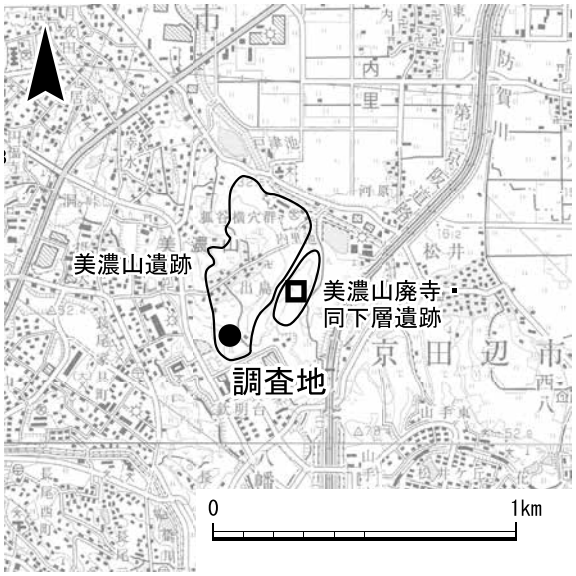
**はじめに**　美濃山遺跡は八幡市南部の標高約52mの丘陵上に位置する。新名神高速道路整備事業に伴い西日本高速道路株式会社の依頼を受けて発掘調査を実施した。調査地より、東方400mには奈良時代の美濃山廃寺や、その下層においては弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴建物群が検出された美濃山廃寺下層遺跡がある。

**調査概要**　調査地の現況は畑地であり、耕作土直下の地山面で遺構を検出した。遺構は調査地中央部より東側の高い位置を中心に分布し、縄文時代の陥穴（おとしあな）状遺構とみられる土坑６基を検出した。周辺からは、縄文時代と考えられる石鏃が出土している。

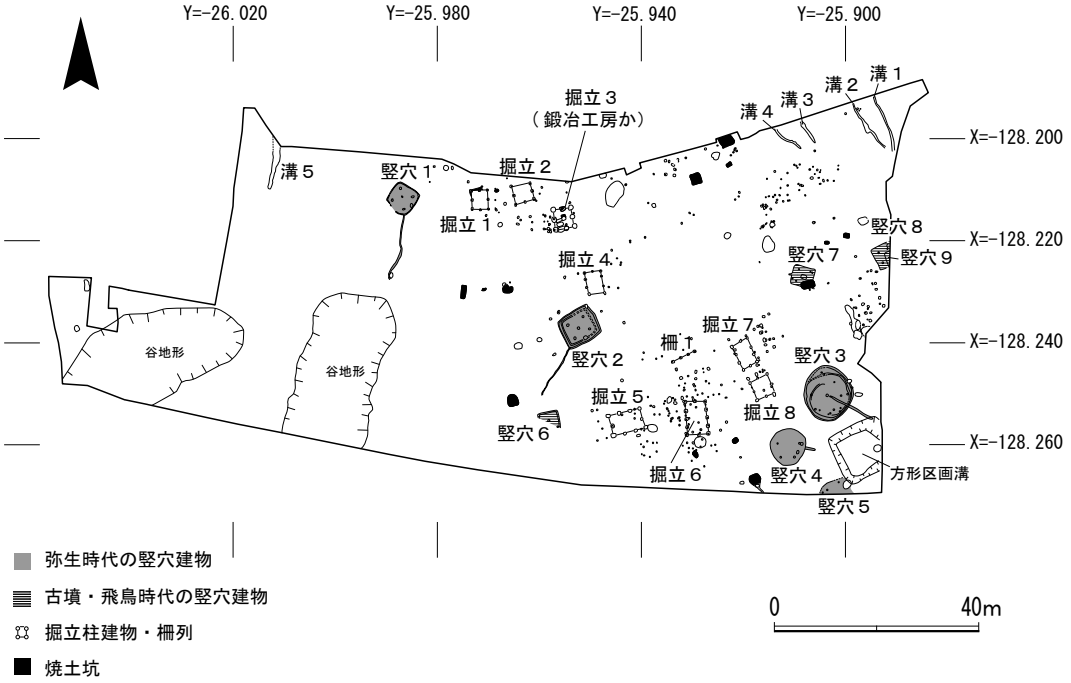
弥生時代の遺構としては、後期の竪穴建物５基・溝５条・土坑・谷地形２か所を検出した。竪穴建物は、大型で住居内より屋外に延びる屋外排水溝が設けられている。

古墳～飛鳥時代では、竪穴建物３基、土坑３基、方形を呈する溝状遺構を検出した。竪穴建物は弥生時代のものと比べて４m前後と小規模である。溝状遺構は、形状から古墳の周溝の可能性がある。古墳の周溝として復元すると、一辺約９m規模の方墳として復元される。溝内から、飛鳥～奈良時代の土器が出土している。

奈良時代の遺構としては、掘立柱建物８棟、柵列１条を検出した建物は北側に分布する４棟、南側に分布する４棟と柵１条からなる一群の南・北二群に分けられる。方位からは西に5°・10°・15°・25°振る４群に分けられるが、小型の建物で構成されている。その他壁面・底面が火を受け赤く焼け締った土坑21基を検出した。これらは規模の大小が認められる。時期については不明であるが、遺構の切り合い、周辺の遺構との関係などから奈良時代の可能性が高い。土坑群の一部は木炭窯と考えられる。また、土坑群のなかには、少量ではあるが小鉄片、小鉄塊、鍛造剝片が出土し、周辺から鍛冶滓が出土していることから、鍛冶炉と考えられる土坑もある。




第１図　調査位置図
（国土地理院　1/25,000　京都西南部）




第２図　美濃山遺跡　調査区遺構平面図

**まとめ**　今回の調査では縄文時代～奈良時代にかけての竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝、焼土坑、谷状地形を調査した。

縄文時代においては、陥穴状遺構・石鏃の出土等から、丘陵上の広範囲が生活圏として利用されていた可能性がある。

弥生時代においては、竪穴建物５基と土坑を検出した。近接する美濃山廃寺下層遺跡では、同時期の竪穴建物33基を調査しており、両遺跡の未調査部分を考慮すると、美濃山丘陵上の広範囲に数多くの竪穴建物が分布していると推測される。検出された美濃山遺跡の竪穴建物は最大２回の建て替えがあり、美濃山廃寺下層遺跡では、最大４基の竪穴建物が重複していることから、これらの集落は短期間で廃絶したとは考えにくい状況である。美濃山遺跡や美濃山廃寺下層遺跡と同様の丘陵上に立地する八幡市内の弥生時代後期の集落には、南山遺跡や備前遺跡、西ノ口遺跡などが確認できる。

奈良時代の掘立柱建物群は、北群のものは南群のものに比べて小規模である。鍛冶炉と考えられる土坑を伴った掘立柱建物３は、大型の柱穴を持ち、四隅の柱穴は特に深くなっている。火災防止のための高い天井、それを保つ深い柱穴であったと推察される。周囲の小規模な建物は、この工房に付随する製品や原料などを保管するための建物であった可能性がある。その他、竪穴建物４最上層の包含層からは、ひさご形土製品が出土していることや、鍛冶工房の存在等からも美濃山廃寺との関連が注目される。

（増田 孝彦）

# 11. 水主神社東遺跡第９次

**所 在 地**　城陽市寺田大畔

**調査期間**　平成29年10月17日～平成30年２月28日

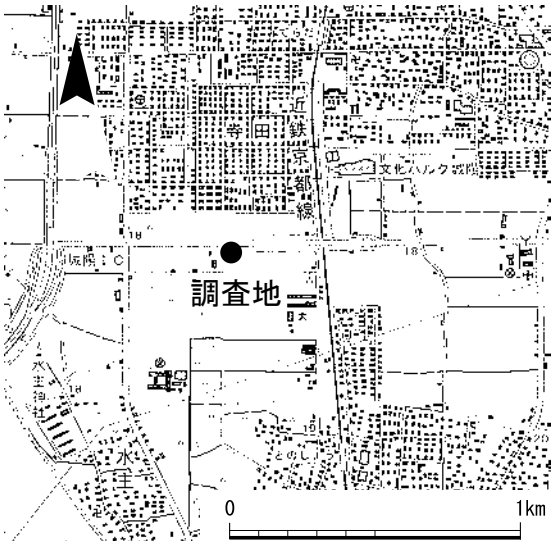
**調査面積**　2,500㎡

**はじめに**　水主神社東遺跡は城陽市の西部、木津川右岸の微高地と後背湿地に立地している。本遺跡はこれまでの調査により、縄文時代～近世の複合遺跡であることが明らかになっている。今回は国道24号寺田拡幅事業に先立ち、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受け、発掘調査を実施した。

**調査概要**　調査対象地の東側に１トレンチ、西側に２トレンチの２か所を設定し、調査を実施した。

１トレンチでは、中世の島畑８基を検出した。島畑はすべて南北方向に造成されており、調査区の外側へ伸長することを確認した。下層遺構確認のために調査区の西側を深く掘削したところ、青灰色シルト層から縄文時代後期中頃の土器片が出土した。特に遺物出土が多い部分を中心に精査したところ、縄文時代後期中頃の土器片や石製品が落ち込み状の地形からまとまって出土した。生活に適さないと考えられる湿地の様相を示す土層中からの出土であるが、１か所にまとまって出土し、遺物に摩滅がみられないことから、人為的に投棄された可能性が指摘できる。

２トレンチでは、中世の島畑５基を検出した。すべて南北方向に造成されており、調査区外へ延びることを確認した。島畑下層で北西から南東に向かって延びる溝ＳＤ11を確認した。溝の埋土から、弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器片が出土している。また、調査区南側断面でピット状の遺構および土坑を確認したが、他に遺構や遺物は認められなかった。さらに、下層遺構確認のため、調査区の中央部を深く掘り下げたが、遺構や遺物は認められなかった。




調査位置図
（国土地理院　1/25,000　京都西南部）

**まとめ**　１・２トレンチで、中世の島畑群および島畑に関連する遺構を確認した。これらの遺構は近接する下水主遺跡でも確認されており、調査地周辺の土地が島畑として広い範囲で利用されていたことがうかがえる。１・２トレンチでは、島畑の間隔が広くなる部分が存在し、土地の境界を示す可能性があり、条里制との関連が考えられる。１トレンチで出土した縄文時代後期中頃に属する資料群は、木津川流域におけ

写真１　２区全景(南東から)

る縄文時代の人類活動について考察する好材料となりうる。２トレンチの島畑下層で検出した溝ＳＤ11は、近接する下水主遺跡で類似した検出例があり、性格は不明だが、木津川あるいは木津川に付随する小河川からの水路などに関連する可能性が高い。

（面 将道）

# 12. 芝山（しばやま）遺跡第17次Ⅰ地区

**所 在 地**　城陽市寺田大畦

**調査期間**　平成29年10月17日～平成30年２月28日

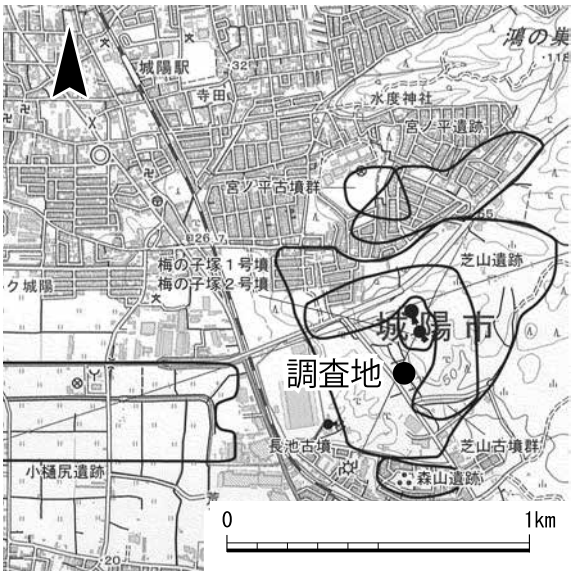
**調査面積**　2,590㎡

**はじめに**　芝山遺跡は城陽市の東半部を占める丘陵の西端に位置する。古墳時代中期から奈良時代に形成された古墳及び集落跡を中心とした遺跡であり、その遺跡の範囲は東西約950m、南北約840mと広がっている。芝山遺跡の調査は昭和52年の城陽市教育委員会による鉄塔工事に伴う発掘調査以後、府道建設、新名神高速道路関係等により継続して発掘調査が進められ、平成29年度も新名神関係遺跡の調査として６か所5,300㎡以上の発掘調査を実施している。そのうち、府道256号の東側に位置し、南北方向に長いトレンチを設定して発掘調査をおこなった芝山遺跡Ⅰ地区（芝山遺跡第17次調査）の調査成果の概略を記す。

**調査概要**　今回の調査地は府道256号の東側で平成13年度の４トレンチの東側、平成28年度のＡ地区の西側に設定した東西10～14m、南北約105mの南北方向に長いトレンチである。

これまでの調査では、平成13年度４トレンチで自然の谷地形（ＳＤ31）とその北側で掘立柱建物跡を検出しており、平成28年度Ａトレンチの調査でも掘立柱建物跡を検出している。

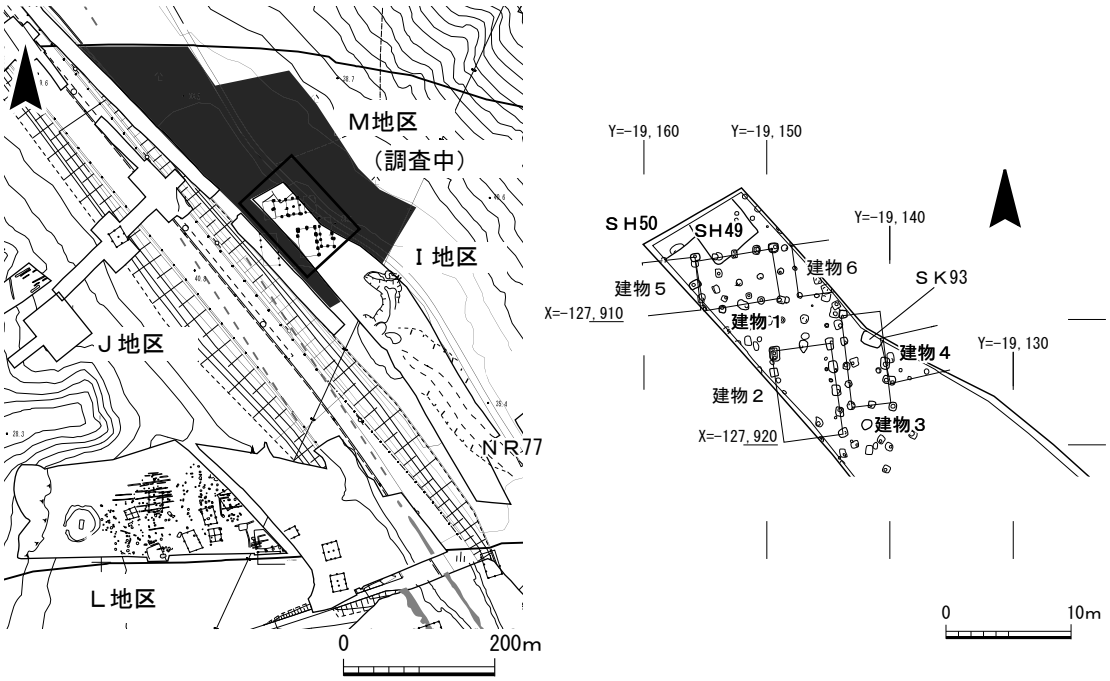
調査区は南北に長いトレンチで、古墳時代の竪穴建物２基、奈良時代と思われる総数65基以上の掘形、３基以上の土坑、近世以降の炭窯と南北方向の溝状遺構、多くの耕作と思われる小溝を検出し、トレンチの中央で平成13年度に検出している谷地形（ＳＤ31）を境に大きくは北半部と南半部で遺構・遺物の状況が異なることが明らかとなった。




第１図　調査地位置図
（国土地理院　1/25,000　宇治）

**北半部の調査**　トレンチ北端で竪穴建物２基（ＳＨ49・ＳＨ50）を検出した。いずれも方形で重複関係にあり、遺構の検出状況からＳＨ50の後にＳＨ49が建てられている。両竪穴建物からは土師器細片が出土している。

掘立柱建物跡に伴う掘形は南北23mの範囲で65基以上を数え、その配列から６棟の掘立柱建物を復元した。建物１は、桁行４間（6.6m）、梁行２間（4.2m）の東西棟の建物跡である。建物２は桁行２間（4.8m）、梁行４間（7.35m）の南北棟の建物跡である。建物３は桁行２間（3.6m）、梁行４間（7.8m）で建物２の東側に近接してある南北棟の建物跡である。建物４は東西１間（3.0m）




第２図　芝山遺跡Ｉ地区遺構配置図

以上、南北２間（3.5m）以上の建物で、建物１・２・３の掘形規模が一辺0.5～0.8mで方形にあるのに対して円形でその規模が直径0.3mと小さい。建物４は掘形の切り合い関係から建物３の後に建てられている。建物５は建物１の西側で、掘形の切り合い関係から建物１の後に建てられたもので、東西１間（2.5m）以上、南北１間（2.0m）以上で、トレンチ西側にさらにのびる建物である。建物６は建物１の東側にある東西１間（2.0m）以上、南北２間（4.0m）の建物で、トレンチ東側にさらにのびる。遺物を含んだ土坑にはＳＫ93・ＳＫ123がある。ＳＫ93は建物４の掘形を切っている一辺1.8m、深さ0.2mを測る不整形の土坑で、奈良時代の土師器が出土した。ＳＫ123はトレンチ中央の谷部で検出した直径2.2m、深さ0.3mを測る円形土坑で、奈良時代の土師器・須恵器が出土した。

**南半部の調査**　自然の谷地形（ＳＤ31）を境にした南半部では、北半部で検出できた奈良時代の掘立柱建物跡・土坑などはなく、ＳＤ31に繋がる南北方向の自然流路ＮＲ77があり、その上面は幅1.5m、厚さ0.2m程度で固く突き固められた面がある。ＮＲ77からは遺物が出土していないため、時期は明らかでないが、奈良時代の土坑SK123よりも上の面で検出している。また、ＮＲ77の東で１基の方形炭窯を検出した。なお、トレンチ南端では平成28年度Ａトレンチの調査で検出されたような掘形は検出できず、Ａトレンチで検出した建物群が今回の調査区までは広がらなかったか、近世以降の東西溝によって削平された可能性が考えられる。

**まとめ**　今回のＩ地区の調査では、自然の谷地形を挟んだ南側では顕著な遺構・遺物は確認できず、北半部では古墳時代の竪穴建物と奈良時代の掘立柱建物群と土坑を検出した。

（石井 清司）

## 平成 30 年度発掘調査略報

# 1.女布（にょう）遺跡第９次

**所 在 地**　京丹後市久美浜町女布地内

**調査期間**　平成30年６月14日～平成30年８月１日

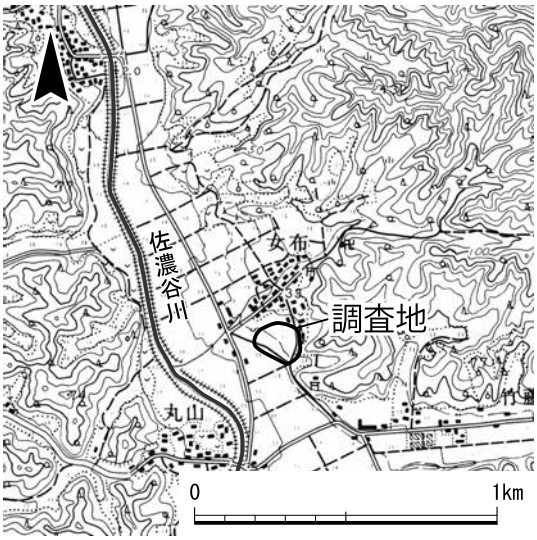
**調査面積**　262㎡

**はじめに**　女布遺跡は、佐濃谷川中流域右岸にあたり、佐濃谷の支流である女布谷川によって形成された扇状地上に位置する。今回の発掘調査は、府営農業競争力強化基盤整備事業に伴い京都府丹後広域振興局の依頼を受けて、実施した。当事業に伴う発掘調査は平成26年度から実施しており、昨年度までの発掘調査では弥生時代後期と古墳時代前期の竪穴建物のほか、平安時代のピットや土坑などを検出している。

**調査概要**　今回の調査では、調査対象地内の水路掘削部分に６か所のトレンチを設定し調査を行った。１～４トレンチが調査対象地内の東側、５・６トレンチが西側に位置する。

１トレンチでは地表下40cmに古墳時代から平安時代の遺物を含む黒色シルト層が堆積する。地山直上でピット状の落ち込みを検出した。地山は褐灰色の締まりのない砂層である。２トレンチでは地山上面が削平されており、遺構および遺物は確認できない。３・４トレンチでは、湿地状の堆積と考えられる黒色～黒褐色礫混じりシルト層から弥生時代後期から平安時代にかけての遺物が出土した。遺構は確認できていない。

５トレンチでは、地表面直下の盛土層から14世紀代とみられる青磁椀が出土した。６トレンチでは戦後の耕地整理に伴う暗渠排水を確認したほか、土坑と溝を検出した。これらの遺構から遺物は出土していないが、埋土の状況や検出層位から平安時代以前の所産と考えられる。５・６トレンチの地山は0.3～1.5mの石を含む砂礫層で、土石流の痕跡もしくは河川の旧流路と考えられる。




調査地位置図
（国土地理院　1/25,000　久美浜）

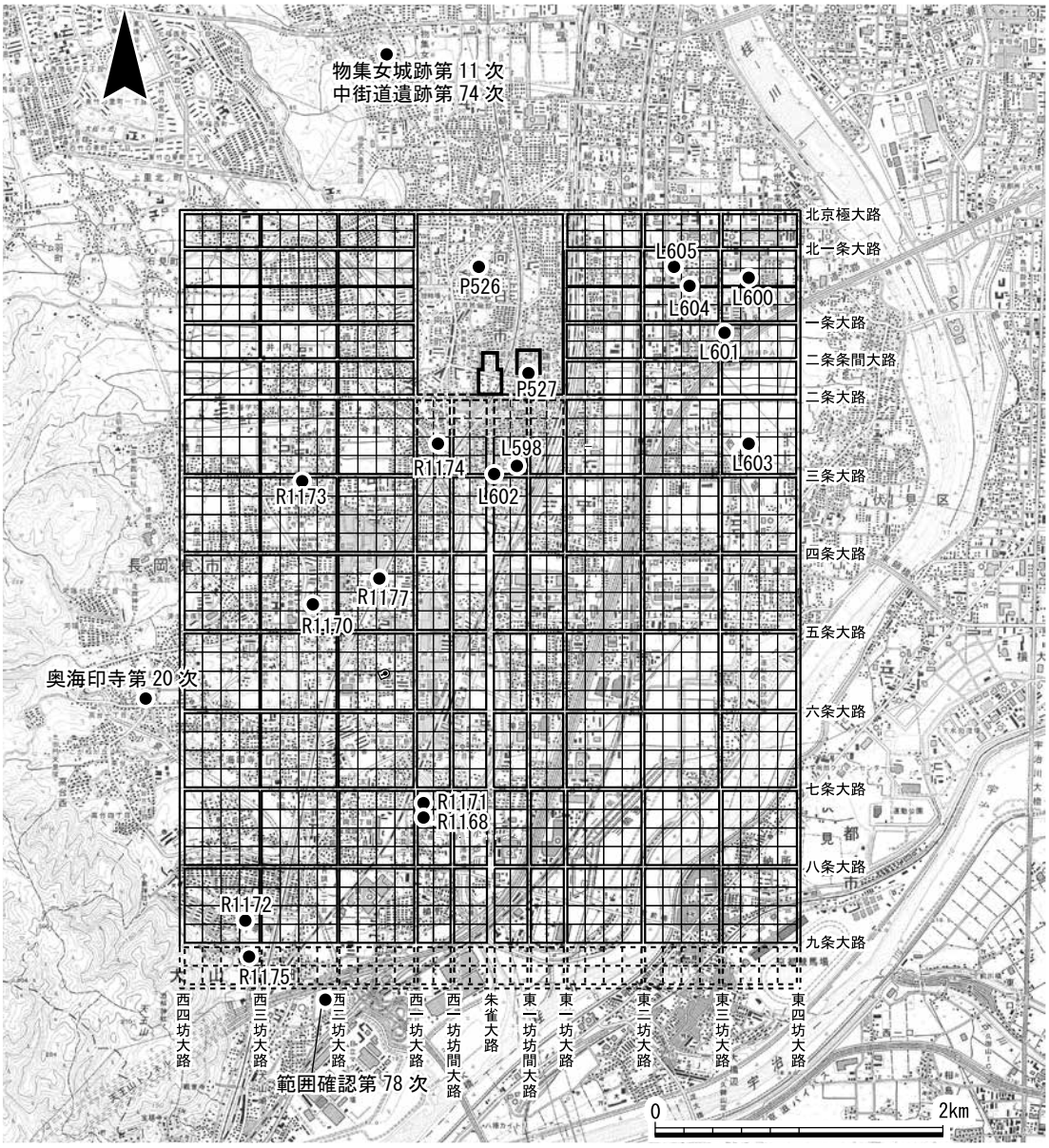
**まとめ**　今回の調査では、顕著な遺構を検出することができなかった。調査の大半を占める３～６トレンチで湿地や旧流路と考えられる堆積を確認し、居住に適さない地形であったことが推測される。

（綾部 侑真）

## 長岡京跡調査だより・130

向日市、長岡京市、大山崎町、京都市、当調査研究センターの各発掘調査機関が長岡宮・京の発掘調査情報の共有化のため、月一度、長岡京連絡協議会を行っている。前年度２月から、今年度上半期で報告のあった、宮内２件、左京域６件、右京域７件、その他２件の発掘調査のうち、主なものについて報告する。

**宮域**　宮域の調査は、上半期では２件実施された。第526次調査地は北辺官衙推定地であったが、長岡京期の遺構を検出することはできなかった。第527次調査では、内裏東宮内郭と南面築地回




調査地位置図（１/50,000）
（向日市文化財事務所・（公財）向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図）
調査地はＰが宮域、Ｒが右京域、Ｌが左京域を示し、数字は次数を示す。

廊推定地であったが、平瓦を敷き詰めた跡と、南面回廊のピット１基が検出されている。

**左京域**　左京第601次調査では、東三坊大路東側溝とともに、柱穴列・土坑・溝状遺構が検出されている。遺物としては、須恵器・土師器だけでなく、緑釉陶器や後世の瓦器・瓦質土器も出土しており、長期に渡っての遺跡であることが判明した。左京第603次調査では、長岡京期の掘立柱建物跡が２基見つかり、第560次調査地と合わせて、左京三条四坊六町の西半分を使っての宅地利用の一部が判明した。中でも井戸１基を検出したが、最下層のみであった。その部分で井戸枠が見つかる。枘をきったものではなく、載せただけの状態で、蒸籠組と思われる。木には墨書は見つからず、書かれていなかったようである。

**右京域**　右京第1170次調査は、かつて八条池があったところで、南側堤跡が現在でも確認できる。長岡京期の遺構では、柱穴が見つかっている。右京第1171・1172次調査では、中世の耕作溝を検出しており、中世になってからの開発の跡が見られる。右京第1173次調査地は、乙訓寺跡第25次調査でもあり、遺構の検出が期待された。結果、飛鳥時代から長岡京期のものとして、掘立柱建物１棟と柱列を検出した。柱列は、西方位を向いており、古代の乙訓寺に関連する可能性もある。この他、古墳時代の柱列や、大型土坑群も見つかっており、土坑からは滑石製の紡錘車や、管玉や埴輪片なども見つかっている。

**その他**　旧乙訓郡域では、長岡京域以外でも、３件の調査が実施されている。まず、物集女城跡第11次・中街道遺跡第74次調査では、中世物集女城の土塁２棟、これと関連する溝１条、縦穴41基を検出し、物集女城の一端を明らかにした。中でも土塁は、北土塁があまり締まりなく作られているのに対して、北東土塁は単なる土塁ではなく、櫓などを設置した基礎部分であると推定された。また、大山崎町教育委員会では、遺跡の範囲確認調査を精力的に進めているが、今時の78次調査では南谷川の旧流路を確認するにとどまった。奥海印寺遺跡第20次では、近代のトイレ遺構や古代の小穴が見つかるにとどまった。

（土橋 誠）

# センターの動向
（平成30年2月～平成30年10月）

| 月 | 日 | |
|---|---|---|
| 2 | 2 | 平成29年度第２回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿地区コンピューター等研究委員会（於:枚方市） |
| | 9 | 第２回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近ブロ主担者会議（於:京都市） |
| | 21 | 長岡京連絡協議会 |
| | 23 | 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議（於:和歌山市） |
| | 24 | 第137回埋蔵文化財セミナー（於:木津川市、参加者139名） |
| 3 | 14 | 長岡京連絡協議会 |
| | 22 | 第26回理事会（於：京都市） |
| 4 | 5 | 新名神美濃山遺跡（八幡市）現地調査開始 |
| | 9 | 24号拡幅水主神社東遺跡（城陽市）現地調査開始 |
| | 12 | 新名神芝山遺跡・水主神社東遺跡（城陽市）現地調査開始 |
| | 23 | 新名神小樋尻遺跡（城陽市）現地調査開始 |
| | 25 | 長岡京連絡協議会 |
| 5 | 9 | 増田理事水主神社東遺跡（城陽市）現地指導 |
| | 17 | 全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会（於:福島県、～18日） |
| | 23 | 長岡京連絡協議会 |
| 6 | 7 | 第27回理事会（於:京都市） |
| | 14 | 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会（於:神戸市、～15日） |
| | 25 | 第８回評議員会（於:京都市） |
| | 27 | 長岡京連絡協議会 |
| 7 | 11 | 京まなび教室等特別講師派遣事業（「勾玉をつくってみよう」長岡京市立長岡第七小学校、24名参加） |
| | 25 | 長岡京連絡協議会 |
| 8 | 1 | 女布遺跡（京丹後市）現地調査終了 |
| | 3 | 平成30年度第１回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿地区コンピューター等研究委員会（於：堺市） |
| | 4 | 「発掘された京都の歴史2018」開始（於:向日市文化資料館、～26日） |
| | 15 | 夏の考古学体験講座「勾玉をつくろう！」(参加者181名、～17日） |
| | 21 | 役員協議会（於:向日市） |
| | 22 | 長岡京連絡協議会 |
| | 25 | 国営亀岡春日部遺跡（亀岡市）現地説明会（参加者101名） |
| | 26 | 「発掘された京都の歴史2018」終了（向日市文化資料館、参加者1,767名、４日～） |
| | 28 | 上野遺跡（京丹後市）現地調査開始、女布遺跡発掘調査報告会（参加者16名） |

9　1　関西考古学の日　秋の考古学講座「丹波の古代寺院と瓦」（参加者13名）

2　新名神芝山遺跡（城陽市）現地説明会（参加者196名）

5　「発掘された京都の歴史2018」開始（京都府立山城郷土資料館、～23日）

18　都出理事美濃山遺跡（八幡市）現地指導、国営亀岡春日部遺跡・金生寺遺跡（亀岡市）現地調査終了

23　「発掘された京都の歴史2018」終了（京都府立山城郷土資料館、参加者470名、～５日）

25　奈具遺跡（京丹後市)現地調査開始

26　長岡京連絡協議会

29　「発掘された京都の歴史2018」開始（京都府立丹後郷土資料館、～10月14日）

10　2　上原理事・菱田理事美濃山遺跡（八幡市）現地指導

10　京まなび教室等特別講師派遣事業（「ふれてみよう考古遺物」、参加者12名）

14　「発掘された京都の歴史2018」終了（京都府立丹後郷土資料館、参加者321名、９月29日～）

20　関西考古学の日　秋の考古学講座「上京惣構の実像をさぐる」（参加者14名）

24　長岡京連絡協議会

25　平成30年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会（於:千葉市）

## 編集後記

朝夕の寒さが強まり、紅葉の季節もいよいよ終わりを迎えようとしています。今年の夏は猛暑と度重なる台風で天候不順が続き、紅葉がいつも年よりも一層美しく目に映ります。

ここに、『京都府埋蔵文化財情報』第134号が完成しましたので、お届けいたします。本号では、平成29年度・30年度の京都府内における埋蔵文化財の調査成果の概要をいち早くお伝えするとともに、城陽市下水主遺跡で出土した縄文時代樹木の樹種分析や、瓦塔や木簡の出土で注目される亀岡市佐伯遺跡の調査成果を掲載いたしました。ご味読いただきましたら、幸いです。

（編集担当　高野 陽子）

京都府埋蔵文化財情報　第134号
平成30年11月30日
発行　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel　(075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　中西印刷 株式会社
〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入ル
Tel　075-441-3155(代)　Fax 075-417-2050

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER